

## 2013年5月9日・週刊きたかみ「文芸」欄では

### 『渚と修羅——震災・原発・賢治』発刊

コールサック社

仙台市出身の高橋郁男氏がコールサック社から「渚と修羅——震災・原発・賢治」（B6判 223ページ）を発刊した。震災以後、福島や宮城、岩手の被災地を歩き、宮沢賢治の、現代に通じる視座から触発され、2年かけて書いた。

大地震・津波の被災者の鎮魂に終わらず、新聞社の現役時代、原発の「人間が制御不可能に陥る危険性を属性として持つ巨大科学技術への疑問」を基本にして書いてきたが、「神の領域」に手を突っ込んだ「報い」を通じ、過去の自身への疑問と現状を問い詰め、「書き記す者」として「未来に向けて記述していくことが務めのように思われた」と語る。

失敗を振り返ることのない経済と科学に生きる驕慢な人間への疑問と弾劾の書にもなっている。

内容は、その時から・被災地へ・原発の来た道・原発破綻への道・脱原発への道・津波と堤防・賢治という「翼」・賢治と東京、東北・賢治の「伝言」・「時の渚」へ・年が明けて・3.11 ふたたび・再稼働と賢治の「慢」の13章で構成。「その時」で、いわば近・現代のあらゆる知、文化が構築された渚の破綻から、海底へ引き込まれる意味を問い、修羅の現実への思いを客観的に描く。

Ⅲ章「原発の来た道」では「神の領域」の黙示的な面に目を向け、「原発の周りにつくられた幾つもの死角や目隠し、そして誘惑などがあった」と、原発にいたる政治・経済の状況の背景を論難。Ⅳ章の「原発破綻への道」に通じ、『戦後の経済成長期の人口減に悩み、時代から取り残されたくないという思いを持つ地方の弱みにつけこんだ「開発」という名の誘惑』に連なる。渚の寸断、喪失は民俗学者の谷川健一の著書を引き、自然海岸の破壊と現代への盲信の結果としての原発を表し、国や業界の隠蔽体質を指摘した。

「美しい渚に巨大な原発のドームが立ち並ぶ光景を見るたびにそんな原発推進側の本音が聞こえてくるような気がする」と現実にある風景からの「いかがわしさ」を示唆。

Ⅷ章の「賢治と東京、東北」では、蝦夷としての東北の地、中央の支配下に置かれ続けた東北。人間からエネルギーまで、首都への供給地になったとも語る。東京の表裏の現実にも触れ、「吸血都市」「ソドム」と断定し得ない「物悲しさや憂愁がつきまとっている」と、東京という都市の両面性にも言及。

大地震・津波で破綻に至るまでの道を敷いてきた政治の責任の重さも指摘し、根本的な見直しをせずに進める原発再開を批判している。賢治の「今日の時代一般の巨きな病、「慢」というもの」の言葉こそが「響き渡る」という筆者。

現代と為政者に、無意識に蔓延しているような「慢」への怒りが同書に通底する。

筆者は元朝日新聞勤務。社会部長・論説委員を経て、04年から天声人語を担当。09年退社後、フリー。

と紹介されています。